

2026年3月30日(月)

老球の細道911

3月の言葉

バスケットボールコーチ 室井 富仁

3月末で手術後2ヵ月が経過した。今は術後合併症に悩ませられながら、後期抗がん剤治療に勤しんでいる。その合間に高校、ミニの試合を楽しんだ。春よ来い、早く来い。

1・読書から

◆「歩くために必要な力は、実は根性と気力です。そして“がんばれる”ということは気力があるということ。つまり脳の若さです」〈萬田緑平著『棺桶まで歩こう』幻冬舎新書〉：がんの術後で体重がどんどん減っているが、体重は減っても体力は落ちないように毎日ウォーキングをしている。この気力は若い時からバスケットで培った自主トレの成果である。

◆「松本清張が森本太郎へ。『きみ、作家の条件って何だと思う?』『才能でしょう』と森本太郎が答えると、ニヤリとしながら『違う。原稿用紙を置いた机の前にどのくらい長く座ってられるかというその忍耐力さ』」〈半藤一利著『清張さんと司馬さん』NHK出版〉：作家もコーチも一流と言われる人たちは皆同じ。現場にいかにも長くいても平気であること。

2・新聞から

◆「未完で生まれて、未完で生きて、未完で死ぬ」〈朝日：折々のことば：横尾忠則〉：故映画俳優の高倉健さんのイラストポスターなどで有名な前衛芸術家である。「人間はいつもどこかに向かう途上にある。止まれば命が途絶える過客」という。90歳の今でも現役である。

◆「歩く、見る、聞く、考える。さらに現代社会へと発信する。大切なのは学び続けること」〈朝日：ひと：野本寛一〉：元高校教員の民俗学者。89歳の現在でも全国を歩き回りながら長年の研究成果をまとめている。民族伝承、先人の知恵を掘り起こし、日本人の精神を書き残すことが自分の責務だという。知の巨人は何事もやり続けることから生まれる。

◆「『事故がありえない』ということはありません。それがあの惨事の最大の教訓です。常に自覚しなければなりません」〈朝日：交論：原子力・核問題研究者〉：年をとってから「ありえない」ということが何度もあった。「東日本大震災」「新型コロナ」「がん罹患」・

◆「勇気とは立ち上がり、発言すること。あるいは着席し、耳を傾けることも勇気である」〈朝日：天声人語〉：英元首相チャーチルの言葉である。自分の自慢話ばかりしているトランプに聞かせたい。必要な時に発言し、異論に対しても耳を傾けることは、コーチにも大切なコミュニケーション能力である。

◆「もし真理というものがあれば、それは地下水みたいなものです。どこを掘っても出てくるんですね。ただ、あちこちチョロチョロと動いていると、水は出てこない。一か所にじっと止まって掘り続ける。・・・そういうことで真理が見えてくる」〈朝日：中村哲さんの思いと言葉〉：アフガニスタンでの診療活動から用水路の建設で砂漠を緑の土地に変えたが、功むなく6年前に銃弾に倒れた医師の言葉である。「誰もいかない所に行き、誰もやりたがらないことやる」というのが中村さんの信念だった。行動の怪物もやり続けることから。